

「おとな」の歌 本田一弘

私が住む会津若松に「老町」という名のバス停がある。「おとなまち」と訓む。「老」を「おとな」という肯定的な視点で捉えなおした価値観が訓みに表れておりとてもいい名だと思つてゐる（だが、五十年ほど前に町名変更があつたようで現在は住居表示としての「老町」は残つておらず「中町」となつてしまつてゐる）。

さて、今「古い」の歌が面白い。総合誌の特集を見ても『現代短歌』六月号「七十歳の歌人」、『歌壇』九月号「歌人の晩年力―老境の歌の魅力」といつたふうに、いわゆる「古い」の歌に注目が集まつているようだ。

そもそも「古い」とは何か。まずは身体的な不調や衰えといった現象を意味するだろう。だから、「古い」の歌とは、身体的に衰えた自分の身体、残り少ない命の時間、そして迫り来る死をどれだけ冷静に客観的に見ることができたか、それをどのように歌つたかが問われる歌である。身体的に衰えたからといって精神的にも衰えるのか。いや、むしろかえつて「若い」年代には持つことのできなかつた視点や豊かな感覚をもつて自己の存在を見つめつつ歌うことができるのではないだろうか。小高賢は「古いの歌」(『石波新書』)の中で「『古いの歌』のもつてゐる豊穡さは短歌という詩型に新しいエネルギーを注入するのではないだろうか。短歌を楽しみ、生きがいを感じている人々だけではなく、若い歌人

にも刺激を与えるのではないか。」と述べてゐる。

乱暴なことを承知で言う、二十世紀の短歌はまさに「若さ」「青春」を謳歌していた。晶子、牧水、白秋、茂吉そして俵万智が健康的に青春そして恋愛を歌つた。だが、この二十一世紀の百年は様相を異にするはずだ。「若さ」のみが短歌の主題にはならない。「若さ」とともに「古い」が短歌の主題になるのではないか、そんな気がする。小高の言うように「古いの歌」に現代短歌の可能性があると私は確信している。最近出た『定本竹山広全歌集』(ながらみ書房)や岡部桂一郎の遺歌集『坂』(青磁社)の歌を読んでみるとつくづくそう思う。

ところで「古い」の年代というふうな七十代以降を指すと思われる。だが、はたして年齢のみを尺度として「古い」の歌を規定していいのだろうか。先ほども言つたように、「古い」の歌が、身体的に衰えた自分の身体、残り少ない命の時間、そして迫り来る死をどれだけ冷静に客観的に見ることができたか、それをどのように歌つたかが問われる歌であるならば、それは一概に年齢で区切られるものでもないだろう。私は、現在四十五歳の吉川宏志の最近の次のような歌に「古い」の意識を読んでいる。

・あと三十回くらい春に遇えるのは 桜のなかにからだを入れつ
 (『歌壇』七月号)

一般的にはたしかに「古い」というには早すぎるのかもしれない。が、この歌には、「古い」の感慨を踏まえたゆたかな身体感覚が歌われている。「古い」の歌を七十代以降の人々のもものだけにするのは勿体ない。四十代以前の歌人たちも自らの「古い」を見つめ、もっと積極的に「おとな」の歌を作るべきではないか。